



2018年の年頭にあたり

プラズマ・核融合学会会長 吉 田 善 章

明けましておめでとうございます。2018年が皆様にとってよい年となりますよう、またプラズマ・核融合学会にとって新しい展開の始まりとなりますよう祈念いたします。

会長任期の二年のうちに一度だけ「巻頭言」を書けるというのが会長に与えられた特典ということになっています。たしかに書物の「頭」というのは特別な位置を占めています。序文、前書き、緒言、解題の類を読むのは楽しいもので、私などは、本の中身はよくわからなくても、それらを読んで分かった気になっていることが多くあります。しばしばそこには著者の思想や世界観といったものが浮きでています。そう思うと、巻頭言を書くのは結構な重圧です。ここでは、年頭にあたって会員の皆様へ向けたメッセージを述べなくてはならないのですが、なかなか焦点を絞れません。そこで、私にとってひととき印象深かった緒言を思い出しつつ断片集のごときを書いて、この任を果たそうと思います。

まずは学生の頃の思い出：

しばしば語られてきたように、物理学者や技術者のための《涙なしの数学》は存在しない。[Laurent Schwartz, COURS D'ANALYSE (Hermann, 1967) (邦訳:小島 順 他) ロラン・シュヴァルツ『解析学』1巻～7巻(東京書籍, 1970)の「序」から]

励まされたというか、氣勢をそがれたというか……。エコール・ポリテクの先生は、今でもこういう感じでしょうか？私もこんなふうに啖呵をきってから講義を始めたい。いやシュヴァルツ大先生がおっしゃったから重みがあるのでしょうか。

別の意味で「涙なし」では読めなかった本：

この本をおよみくださる読者のおおくの方々のように著者はゴッホを愛している。[藤村信『ゴッホ 星への旅』(岩波新書, 1989)の「はじめに」から]

ここには著者と読者の「連帯」が表明されています。共感が生む連帯——これこそ「人」の生の最も気高い特性です。学会誌をお読みいただく皆さんと同じように私はプラズマを愛している。これがずっと続くように頑張っていきたいものです。

そのためには何が最も大事なのか？私たちの分野は、生後60年ほどを迎え(還暦です！)、第4世代、第5世代の研究者たちが前線を切り開くべき時代となりました。若い皆さんへ向けた言葉：

数学的对象というのは、一度それが定義されてしまえばそれが現実のものと関係があろうがなかろうが、数学的对象として一人歩きできる。数学の問題は、数学の中で閉じ切ってしまうが故に、数学の問題自身には数学者の意識を強制的に変革させる力はないのである。見ようとしていない者には何も見えないし、聞こうとしていない者には何も聞こえはしない。それ故、数学の変革は常に、新種の数学の発生という形で起こるのである。[大森英樹『一般力学系と場の幾何学』(裳華房, 1991)の「序」から]

数学をプラズマ研究に置き換えても、まったくそのとおりだと思います。「新種のプラズマ」の発生が私たちの分野に変革をもたらしてくれることを期待しています。そのためには、見ようとする、聞こうとする文化が必要です。最近この文化が衰退しているのではないかと少々心配しています。感性を研ぎ澄まして話を聞かねば……。そんな緊張感が伝わってくる緒言：

D-加群の理論は、佐藤幹夫先生が1960年の東京大学数学教室の談話会でその枠組みについて話されたのが、研究の出発点ではなかったかと思われ



る。佐藤先生のD-加群導入の動機を簡単に述べよう。[柏原正樹『代数解析概論』(岩波書店, 2008)の「序論」から]

代数解析で「新種の数学」が生まれたとき、プラズマも貢献したことを記憶しておきましょう。種はいろいろな場所で芽を吹きます。コミュニティがその土壌です。広く豊饒な大地とは何か、皆さんと一緒に考えていこうと思います。

前記は天才の師匠ととびきり秀才の弟子たちのエピソード。対して、次の消息は孤高の天才のありようを伝えていて、いささか胸にしみます：

1797年の『新ドイツ・メルクーア』は、ケーニヒスベルク発のニュースを報じている。「カントは今年『人間学』を上梓する。彼がこの論考をいままで自分の手もとにとどめてきたのは、受け持ちの講座のうちで学生が集まるのはもうそれくらいしかなかったからだ。もはや講義をしない以上、公衆の手にゆだねるのを渋ることはない」……[中略]……講義は最終的に打ち切れ、カントはそのテキストを印刷に付した。[M. Foucault, INTRODUCTION A L'ANTHROPOLOGIE DE KANT (Librairie philosophique J. Vrin, 2008) (邦訳：王寺賢太) ミシェル・フーコー『カントの人間学』(新潮社, 2010)の冒頭「1.『人間学』の日付」から]

会誌の中には、そんなテキストもあるのでしょう。碩学の皆さん、ふるって寄稿お願いします。

私自身は(歳を省みず)アヴァンギャルドを自認しています。ですから次のような文にふれると深く感動します：

一冊の本には対象もなければ主題もない。本は種々さまざまな具合に形作られる素材や、それぞれまったく異なるさまざまな日付や速度でできているのだ。本を何かある主題に帰属させるということはただちに、さまざまな素材の働きを、そしてそれら素材間の関係の外部性をないがしろにするということだ。……[中略]……測定可能なもろもろの線や速度は、一つのアレンジメント agencement を形成する。本とはそのようなアレンジメントであり、そのようなものとして、何ものにも帰属しえない。それは一個の多様体なのだ。[G. Deleuze & F. Guattari, MILLE PLATEAUX: Capitalisme et schizophrénie (Les Editions de Minuit, 1980) (邦訳：宇野邦一 他) ジル・ドゥルーズ&フェリックス・ガタリ『千のプラトー：資本主義と分裂病』(河出書房新社, 1994)の「序 —リゾーム」から]

うーむ……そんな本を書いてみたい。けっして売れないでしょうが。ドゥルーズがりゾーム rhizome と呼ぶのは、植物の「ひげね」のごとく地中に繁茂する逃走線たち。「機関」として「構造」に従属するではなく、自らの越境する力で運動する。何でも最初は不定形だ。動きだけがある。そこから何かが生まれる。私たちもそのような運動体でありたい。

さて、ここでみてきた言葉はすべて、何らかの意味で「個人的な時間」に係わるものだとすることに気がきます。先人たち、他人たちが経験した時間と自分の時間を重ね合わせるプロセスが学びであり共感であり、またアレンジメントなのです。そこから自分にとっての時間が新しい命を得て再生を繰り返す。哲学が「時間」について物理学とは違う意味を発見し、個人の「生」に関わる特別なものとして最後まで取り置こうとするのは、まさにこのためだと思います。真に時間的なものとは、構造という概念では引き受けられない、個別的で、偶然的で、しかも決定的なものです。しかし私たちの周りでは、「組織」という架空のものが規定する時間、つまり「機関」の効率を計るための時間ばかりが強調されていないでしょうか。まさに疎外の構造。私たちとしては、自分にとっての固有時間 proper time を取り戻し、その循環の上で自らの活動と世界との関係を考えようではありませんか。すると、損得とは違ったものごとの意味がみえてくるはずです。前掲『ゴッホ 星への旅』の冒頭に掲げられた、ゴッホから弟テオに宛てた手紙(書簡508)の一部を引用して、この稿を終えることにします：

おおくの画家たちは——ここでは画家のことだけとりあげていうならば——死んで埋められても、その作品を通じて、次の世代、また次の世代へ語りかけている。それだけがすべてなのか、あるいはもっとほかにもなにかあるのか。絵描きの生涯において、おそらく、死はかれらの遭遇する最大の苦難ではないであろう。

ぼくにはそれがどんなものか、知るよしもないが、いつも星をみつめていると、地図の上の町と村を表示する黒点がぼくを夢みさせるように、おのずと夢見心地になってしまう。なぜ天空の光点は、フランス地図の黒点よりも、近づきがたいのだろうか、ぼくはつい考えこんでしまう。[藤村信『ゴッホ 星への旅』(岩波新書, 1989)のエピグラフから]